

令和4年度第2回千葉県県民活動推進懇談会 開催結果概要

1 日 時

令和4年11月17日（木） 午後2時から4時

2 場 所

千葉県教育会館本館6階 608会議室

3 出席者

鎌田委員、関谷委員、牧野委員、山本委員、白井委員、山田委員、吉田委員、宮本委員

※以上8名

事務局5名（課長、副課長、県民活動推進班長、担当2名）

4 議事の概要

議題（1）「千葉県県民活動推進計画（令和5～7年度）」の計画素案について

○鎌田座長

最初に懇談会ですが、開催結果概要については、事務局で取りまとめ、各委員に確認した上で千葉県ホームページに掲載いたしますのでご了承ください。

それでは、議題（1）の「千葉県県民活動推進計画（令和5～7年度）」の計画素案について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局

まず、資料1で次期計画の構成（案）についてご説明差し上げたいと思います。赤字になっている所が、前計画と比べて変更があった所となりますので、赤字の所を中心にご説明差し上げたいと思います。

第1章でございますけれども、3の「計画の期間」の後ろに「用語について」という項目を入れています。用語につきましては、前計画では計画の途中途中で挟み込んであるというような記載の仕方をしておりましたが、計画を理解する上で必要な基本的な用語につきましては、初めにまとめて説明した方が分かりやすいのではないかとということで、市民活動団体や中間支援組織等について説明を入れたところでございます。

第2章ですけれども、1から3の定義、必要性、意義、この辺りにつきましては、前計画の内容を踏まえまして、文言や書きぶり等の再整理をさせていただきました。それから、今回、「4」としまして、「主な主体とその役割」を新たに記載したところでございます。これにつきましては、地域課題の解決を図る上で地域に様々なプレイヤーがいる中で、相互理解と共通認識を持って取組を連携

して進めていくことができるように、それぞれのプレイヤーについて期待される役割を整理しています。

第3章につきましては、前計画における県の取組と指標の状況を記載しております。

第4章につきましては、今回大きく書き込んだところがございますけれども、第5章の施策の方向性といったものを理解しやすくするために、取り巻く情勢と課題をきちんと整理していこうということで今回書き込んだ所になります。

第5章ですが、前回の骨子案の時に、施策の方向性として元々4つあった柱を3つにしますとご説明を差し上げて、皆様にご了解いただいたかと思いますが、そのとおり3つにして少し文言等を整理したところがございます。

第6章につきましては、推進体制と進行管理ということで、引き続き、前計画と同様に記載しています。

構成（案）は以上のとおりでございます。

続きまして、資料2で素案の概要についてご説明差し上げたいと思います。資料3が分厚い冊子のようになっておりますので、ここでざっと全体についてご説明を差し上げます。素案については骨子案をベースとしまして、前回の懇談会での皆様の意見を踏まえまして、少し肉付けをしたところでございます。資料の4で、前回皆様からいただいたご意見、そしてそれをどのように反映させているかというものを付けておりますけれども、一つ一つ説明をさせていただくとかなり長くなりますので、素案の概要を説明する中でどのように反映したか、といったところも含めてご説明できればと思っております。

では、第1章でございますけれども、初めに計画策定の趣旨でございます。前段で、まず県民活動の重要性であるとか、連携・協働の重要性といった県民活動に対する基本的な考え方について述べた上で、感染症の拡大による影響や、頻発する災害を背景に共助の重要性が再認識されていること、あるいは、東京2020大会を契機として、県としましても様々な取組をしてきた訳でございますけれども、そういった取組の成果をいかにレガシーとして地域に残していくのか、そういった必要性があるといったことなどを踏まえて、今回新たに策定を行うというのが計画策定の趣旨でございます。

計画の性格あるいは期間についてはご覧のとおりです。

第2章でございますけれども、先程も申し上げました定義、必要性、意義につきましては、前計画の内容を踏まえて少し文言等を整理させていただいたところがございます。それから、4の主な主体とその役割については、ここは先程書き加えたところであるとご説明差し上げましたが、前回の

懇談会の中で、県と市町村との関係性につきまして、補完性の原理といったものをきちんと書き込むべきではないかというご意見がございましたので、ここの中で書き込ませていただいております。また、学校と地域の連携といった取組もあるのではないかと、あるいは、若年層の参加が非常に重要であるのご意見もございましたので、学校の役割といったところもこの中で書き込んでおります。

第3章は前計画における県の取組と評価です。1の前計画における県の取組状況でございますけれども、これまで取り組んできた事業の主なものについて、その実施概要をまとめて記載しています。2の成果指標の状況ですが、前計画では柱を4本立てておりまして、7つの指標を立てていました。ここではそうした指標の状況、達成・未達成の原因の分析を記載しております。具体的には、下線を引いた2つの目標が達成したものとなっております。その他、残念ながら5つの目標については、未達成という形になりました。原因ですが、令和2年度に数値が落ち込んでいるということがございまして、感染症の拡大が県民活動に非常に大きな影響を与えたと考えています。

続きまして、第4章でございます。先程、今回の計画の中で書き込んだ所だという風に申し上げましたけれども、前回、骨子案の時にご説明した現状と課題をベースにしまして、皆様のご意見を踏まえて少し書き込んだ所でございます。前回、コロナで社会の接点が少なくなることによって心の相談が増えているといったようなご意見がございました。そういった中で、(2)に深刻化する社会的な孤独・孤立といった項目を加えております。また、働く世代、あとはプロボノといった言葉も出ましたけれども、そうしたところの参画が非常に重要になってくるというお話もあったかと思っております。その辺のお話は、(3)のワーク・ライフ・バランスの推進の所で書かせていただいております。それから、公共私の見直しの中で、私の領域でできることとして、シェアリングエコノミーの視点が重要ではないかというご意見もございました。これにつきましては、(5)のデジタル社会の進展の所で、デジタルの力を活かして資源をシェアしていく、そうした中で地域の課題解決に繋げていくことが期待されているというようなお話を書かせていただきました。それから、災害・感染症等のリスクの増大の所ですけれども、コロナで活動が制限されている中、ICTの有効性というのは、重々皆様承知をしてきたところかなと思っておりますが、やはり対面と非対面の活動をきちんと組み合わせなければ、ICTの活動だけではなかなか上手くいかないのではないかとというようなご意見があったかと思っております。その辺りにつきましては、(6)の所で記載したところでございます。

では、県内の今の県民活動をめぐる現状と課題については、一体どういったことがあるのだろうか、ということで右側の四角になりますけれども、これにつきましては、県で実施いたしました県政世論調査であるとか、NPO法人の実態調査、こういったところの数値を説明させていただいております。なお、県政世論調査につきましては、令和3年度の結果を記載しておりまして、間もなく令和

4年度の最新の調査結果が出るということでございますので、その結果が出て、傾向が少し変わっているということであれば、書き直す必要があると思っております。もし、書き直すということであれば、次回原案の時にお示しできると思っております。現状でご説明を簡単にさせていただきますと、

(1)の県民活動の理解・参加については、関心がある、活動しているというのは5割ぐらいいらっしゃいますが、継続的に参加しているという方が少し伸び悩んでいます。(2)市民活動団体の状況でございますけれども、運営上の課題について、トップはやはり団体の高齢化で5割を超えております。これは本文の方に書いておりますが、平成23年度の調査を見ますと、その当時のトップは活動資金の問題ということで55.5%でございます。高齢化に関しては28.4%ございました。ここ10年ぐらい経って、やはり人材に対する課題の割合が非常に大きくなっているということが見て取れるかと思っております。それから、コロナの影響ですけれども、徐々に再開しているというところではあります。一方で、約2割はまだ休止であったり縮小が続いているという結果でございます。また、オンラインの活動状況についてですが、やはり県民活動は事業の性質上、全てオンラインに切り替えることが難しいという回答が最も多かったところでございます。また、一方で、オンライン化の取組もできるところから進んでいるということが調査結果から見て取れたところでございます。次に、(3)連携・協働をめぐる状況でございますけれども、連携・協働の経験があるNPO法人は約6割に上っております。ただ、これも本文の方に書きましたが、平成29年度が69.8%ございまして、徐々に減少傾向にあるということが見て取れます。ただ、連携・協働の経験がある法人に聞きますと、9割以上はメリットがあったと回答しています。それから、SDGsの関係ですが、企業につきましては、社会貢献活動の意識が高まっていることが見て取れます。

次に、IIの県民活動の促進に向けた課題ですが、こういった社会環境の変化、それからアンケート調査等を踏まえまして、こういった課題があるかということについて、5つにまとめさせていただいております。まずは、県民活動の裾野の拡大です。やはり多様な世代、若年層、働く世代、シニア層などが、それぞれのライフスタイルとか、ライフステージに合わせて参加できる環境というのが非常に重要ではないかということで書かせていただきました。それから、前回、県民活動はまだハードルが高いのではないかとといったご意見がございました。そういったところも踏まえて、SNS等も活用しまして情報発信をしていく、あるいは一步踏み出していただけると、体験機会の充実が必要ではないかということを書かせていただきました。次に、(2)ですが、継続的に参加している人が非常に伸び悩んでいるところがありまして、その継続的な参加を促進していくということが一つ課題であると考えております。そのためには、やはり手軽に情報にアクセスできるとか、まずは楽しみながら活動ができるといったことが非常に重要であるし、あとは前回の懇談会

の中で、ボランティアをフォローしていかないと、なかなか継続的な活動には繋がらないというようなお話もあったかと思えます。そういった意味では、ボランティアを受け入れる団体側の受け入れ体制なども整えていく必要があるのではないかと、といったことなどについても記載したところがあります。(3)は、市民活動団体等の持続的な活動に向けた基盤強化でございます。先程、高齢化が非常に問題となっているということがございました。また、コロナにより活動の機会が減ったという中で、人材の発掘あるいは育成の機会が減少しております。そういった中で、団体に対する人材確保の支援、あるいはマネジメントの向上に関する研修など、こういったことを引き続いて、やはり行っていく必要があるのではないかと、ということがございます。それから、団体支援を行う上で非常に重要な役割を果たしている、中間支援組織の利用の促進を図るといったことも必要だという風に書かせていただきました。また、寄附に関してですが、前回は寄付の裾野の拡大というのが重要だというようなお話があったかと思えますけれども、その辺のお話しについても、ここに書き込んでいます。(4)感染症への対応については、先程も申し上げましたけれども、対面と非対面の良さを活かしていくことが重要であるということ、それから、(5)でございますが、連携・協働のメリットがあると答えたのは9割以上ということですので、そういったメリット、あるいは優良事例の共有、意見交換の機会を提供して、連携・協働の取組を促進していくということが求められているだろう、ということなどについて、課題としてまとめたところでございます。

第5章でございますけれども、では具体的に施策として何をしていくのかということですが、前回、目指すべき姿として、誰もが当たり前のように県民活動に参加し、地域のみんなの力で未来を切り開く千葉県というスローガンを出させていただきましたが、そのスローガンに関しまして、県民活動の大きな目的って一体何だろう、アウトカムって何なのか、そういった所が問われているのではないかと、あるいは、全員が主体であり、そういった中で支え合うという考え方をもう少し明確に入れた方がよいのではないかと、というようなお話がございましたので、前回はスローガンだけだったのですが、スローガンに加えまして、本文でスローガンの説明みたいなところを少し詳しく書かせていただきました。それから、施策の方向性、あるいは行動計画については、前回ご承認いただいた内容のとおりとなっております、それに紐づく主な取組をいくつか挙げているところでございます。赤字が今回の計画で新しく紐づけたものになります。施策の方向性1「県民活動への理解や参加の促進・定着」の(2)に、マッチングサイトによるボランティア活動機会の提供、あるいはボランティア受け入れのための団体向け研修の実施ということで、これは昨年度から始めた事業になりますけれども、計画としては新しく紐づけるものとなります。それから、施策の方向性2の「市民活動団体等の基盤強化等の支援」でございますけれども、先程申し上げたICTの活用事例を学ぶ研修、

あるいは対面と非対面をいかに組み合わせるかといったようなことを学べる研修等を実施していくこと、それからマッチングサイトあるいはボランティアの受け入れのための団体向けの研修でございますけれども、これらはもちろんボランティアのための支援ということもありますが、一方で、団体支援でもございまして、このサイトを通じて団体の人材の確保を支援していくということで、ここにも位置付けしているところです。また、民が民を支える仕組みの普及・支援でございますが、今、クラウドファンディング等が活発に行われているということがございまして、そういった資金調達の仕組みなどにつきましても研究して、情報提供していくようなことも行っていきたいと考えております。連携・協働に関しましては、SDG s パートナー登録制度とあって、これは総合企画部で実施をしている登録制度でございますけれども、こういったものを普及することによって、連携の取組に繋げていきたいということで、ここに紐づけをしております。なお、赤字で書いた以外についても、広告媒体やSNSを通じた情報発信であるとか、あるいは中間支援組織とのネットワーク会議であるとか、市町村に対するアドバイザーの派遣であるとか、そういった取組も引き続いて行っていきたいと考えてございまして、それぞれ紐づけをしているところでございます。

最後に第6章ですが、推進体制及び進行管理になりますけれども、ここについては引き続き前回計画と変わらず、懇談会と庁内の体制を整え、進行管理も年度ごとに行っていきたく思っております。

それから、今回の素案の中では、成果指標の目標値というものがまだ入っていない状況でございます。これにつきましては、世論調査の結果がまだ出ていないことがございまして、成果指標については空欄とさせていただきます。もうしばらくしますと結果が出る予定になっておりますので、結果が出ましたら次の原案でお示ししたいと思っております。成果指標の立て方の考えですが、先程、2つは目標を達成したとご説明しましたが、達成したものについては、ここ数年の伸び率等を勘案して改めて立てさせていただきたいと思っております。ただ、それ以外の5つは達成ができませんでしたので、その5つに関しましては据え置きという風に、今のところは考えております。

ざっと説明をしてしまいましたけれども、何か足りない論点があるのではないかといたったようなところで、ご意見をいただくと大変有難いと思っております。

それと、もう一つ引き続きで大変恐縮ですが、資料5についてもご説明を差し上げたいと思います。これにつきましては、前回の計画においても取組の事例や、あるいは用語の解説などを資料編の中に入れてございますが、こうした記載があると、なかなか県民活動に馴染みのないような方でも、理解が深まるのではないかと我々も考えてございまして、次期計画でも何か入れられたら、と考えているところでございます。その項目の（案）が資料5になっております。前計画では、例え

ば、東日本大震災を契機にした社会貢献の活動であるとか、あるいはプロボノの話とか、市町村で行っている寄附の取組の話が事例として取り上げられているところがございます。それから、用語等の解説では、寄付月間の話や、あるいは平成26年度に国が共助社会づくりの推進についてという報告書を出しておりますけれども、その中に出てくる用語について解説をしております。次期計画の中で取り上げたいと思っているのが右側になりますけれども、例えば、房総半島台風の中でどういった活動があったのかといったようなところを書かせていただきたいというのが一つ、それから、プロボノの取組事例で何か面白いものがあればという風に思っております。さらに、クラウドファンディング、あとはまちづくり協議会もかなり市町村の方で色々を行っているという風に伺っておりますので、良い取組があればと思っております。なかなか我々も取組の具体的事例が分かってないというところもございますので、是非、面白い取組があればご教示をいただきたいと思っております。それから、用語の解説につきましても、プロボノ、クラウドファンディング、まちづくり協議会とありますが、あともう一つ、労働者協同組合の法律が新しく施行されたということがございますので、その辺りの解説も付けていきたいと思っております。これ以外にも、県民活動を取り巻く新しい潮流やこれは大切にされた方が良いのではないかとといったものがあれば是非ご意見をいただければと思います。

かなり長くなってしまいましたけれども、説明は以上でございます。

○鎌田座長

ありがとうございます。一気にご説明いただきましたが、今までより資料が大きくなって、活字が大きくなって、大変見やすくなっております。ありがとうございます。

資料に基づいて、資料1から5までご説明いただきましたが、1、2、3は計画素案についてで、計画素案が資料3、資料1が計画素案の構成、概要で取り出して説明して下さっているのが資料2ですよね。それで、前回の皆さんのご意見がどのように反映されているかというのが資料4です。事務局からぜひ色々な現場の優良事例などを今日はお話しいただきたいと要望が挙がっているのが資料5です。

どこからというか資料1、2、3は繋がっている中身ですので、中身のどこからでも結構です。まずは、前回の資料の4を見ていただいて、それぞれの委員のご意見が十分対応されているかどうか、その辺を見ながらご説明いただけるとありがたいと思います。いかがでしょうか。

○吉田委員

先にいいですか。

○鎌田座長

どうぞ。

○吉田委員

資料3の今日頂いたものと、事前にデータで頂いたものは多少変わっているのでしょうか。

○事務局

誤字等については若干修正しております。

○吉田委員

文章的に何か入れ替わっているということはないということでしょうか。

○事務局

そうです。

○鎌田座長

吉田委員、修正箇所についてご説明いただく必要はないですか。

○吉田委員

誤字、脱字であれば必要ありません。

○鎌田座長

はい、ありがとうございます。他にいかがでしょうか。ここ良くなったよとお褒めの言葉でも構いません。牧野委員お願いします。

○牧野委員

全体的な印象ですけれども、県民活動＝ボランティア活動というような印象があって、「千葉県ボランティア活動推進計画」なのかな、という印象を受けます。もちろん今までの流れ、継承の中でこういう表現になっているのは重々分かるのですが、どうしても主な取組の所になると、そういう印象を受けるし、これからまた紐づいて、実際の事業になった時にもそういう風になるとしたら、違和感を感じます。全体的にはこれまでの計画を進化させていただいているという風には受け取っておりますが、印象として、そういうような感じがしました。以上です。

○鎌田座長

牧野委員、具体的に、主にどの辺の書きぶりでそのように感じますか。構成が分かりやすいですよ
ね。

○牧野委員

構成のところでは、あまりボランティア活動とは出て来ないのですが、それをどうするかという具体的な取組となると、とたんにボランティア活動ばかりになって、そこがいいのだろうけど、もや

もやがあります。

○鎌田座長

事務局からご説明ありますか。

○事務局

まず、ボランティアとは個人ですが、個人だけだと活動が非常に限られるものですから、団体というのが非常に重要になってくると思います。ただ、いきなり団体に加わるというのは、なかなか皆さんハードルが高いというところがございます、できるだけハードルを下げ、まずはボランティアとして活動に触れ合ってもらい必要があるということで、裾野の拡大というのが非常に重要だという風に考えております。

そういった意味では、ボランティアというのが目立ってしまったのかなということがありますけれども、やはり県民活動に触れる機会、参加する機会を増やして、活動に共感していただいて、是非団体に育っていただきたいという風に考えているところです。

○鎌田座長

山本委員、関連してどういう印象をお持ちですか。

○山本委員

牧野委員のご発言のとおり、確かに具体的な内容やデータの部分で言うと、ボランティアの事が書かれている所が多いと思います。

私の中でも整理ができていないのですが、県の意向というか意識として、県民活動というのは、県民一人一人がボランティアベースで活動するということを推進するということなののでしょうか。私も新しく加わったので、これまでの経緯がしっかり飲み込んでいるという訳ではないですけど、誰もがあたりまえのように県民活動に参加するというスローガンというか目指すべき姿というところで、具体的な内容の所に、ボランティア以外の活動、事例とか団体、企業の取組とか、そういうところをもう少し入れていけば良い気がします。

○白井委員

県民活動がどういうものなのか、たまたま今の行政があまりにもボランティアに頼り過ぎてしまうからこういう計画になるのだと思います。本来は、県民活動の一つとして、ボランティアがあるのであって、その辺を理解していないといけません。しかし、今の行政の末端を見ますと、ほとんど全てがボランティアに頼った形になっているため、ボランティアが強くなるのだと思います。

このため、計画そのものがボランティア活動の推進ではないかと思えてしまいますが、そうではありません。県民一人一人が色々活動していく中に、ボランティア活動も挙げられますよという計

画です。

だけど、今は、行政そのものが何をやるにもボランティアに頼っていて、この間行ったアクアラインマラソンも本来は主体的に県が行わなければいけないけれど、どちらかというボランティアを集めて、ボランティアに指示をしながら行っていました。現状、何か行事を行おうとすると、ほとんどボランティアを活用している状況があります。今はNPO法人ができたから有償のボランティアがありますが、昔はボランティアというのは無償であるのが当たり前でした。県民活動の一つの形にボランティアがありますという計画ですから、基本的な考え方はすごく良いのですが、誰に推進してもらうのかといった時にボランティアとなってしまうと、行き詰ってしまうことがあるので、その辺が少し問題かなと思います、全般的にはこれで私は良いかなと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。地域の側から見てどうでしょうか。吉田委員、その後、宮本委員お願いします。

○吉田委員

私も牧野委員がおっしゃっていたとおり、ボランティアの話ばかりになってしまっている印象を強く受けました。

行政の人間としては分かりますが、私自身、PTAとかおやじの会とか、柏の文化を育てる会という活動を行っていて、そうした立場から見させていただくと、この6頁からの主な主体とその役割という所で、色んな団体を定義づけているのは非常に分かり易くなったと思いますが、課題解決のために全部の団体があるみたいところが前面に出すぎていて、これでは、ボランティア活動をしたことがない一般市民が見たら、やりたくなくなってしまうのではないのでしょうか。

地域活動とか、おやじの会だったり、色んな団体で、地域のコミュニティとか、自分のやりがいとか、自分の趣味の世界があって、その延長線上で多分、課題解決に繋がるのだと思います。課題解決のために活動している訳ではありません。課題解決のために活動しているような子育てグループのお母さん達とかもいますけども、そのお母さん達も、最初からその課題解決のために立ち上がった訳ではなくて、お母さん同士のコミュニティで色んな話をしているうちに、こういう問題があるよねと気が付いて、それでは何かやろうかとなってくるので、そのきっかけの部分を少し触れた上で、二次的なというか、副次的というか、そういうところで最後、課題解決に繋がるのだというような書きぶりの方が取っ付きやすいのかなという感じはしました。

あと、1点、資料2にあります「誰もがあたりまえのように県民活動に参加し、地域みんなの力で未来を切り開く千葉県」の中にある、日常の中で当たり前のように県民活動に参加するというの

は、関谷委員が以前おっしゃっていた日常という言葉が出て来るのですが、日常の中で当たり前にある県民活動は、ボランティアつまり課題解決ではなくて、日常の中にあるコミュニティなり趣味の世界なり、そういったものに皆さんが参加することが先々課題解決に繋がるということであって、県民活動の定義をあまりボランティアに寄せない方が良いと思います。資料3の4頁の県民活動の定義ですけれども、県民全員がボランティアに参加するのはまず無いわけですから、県民みんなが、地域や趣味の世界において、孤独じゃなくて、色んな人たちと関わっていることを目指すという方が、最終的なこの計画を作った到達点としては良いのではないかなと感じました。

○鎌田座長

ありがとうございました。今のお話は支援的な組織等も含めて、日常のコミュニティということですね。

○吉田委員

はい。

○鎌田座長

ありがとうございます。宮本委員お願いします。

○宮本委員

私も少しボランティアという言葉に引っかかった時に、資料3の21頁、実際設問の中で、ここでいうボランティア活動とはということで、市民の自発性に基つき地域や社会に貢献する活動と定義をしてあったので、私は多分自治会も含めるのだろうなというところは分かったのですが、ここをちゃんと読まないと確かにボランティアというと、自分が個人的にやるものという風に思ってしまうのではないのでしょうか。ボランティアの領域を広く考えているならそれをきちんともう少し分かりやすく、どこかに表記した方が良いのではないかと思います。

私はこの設問を見た時に、自治会も含めたボランティア活動というものに、結構皆さん関心があるのだなと思いました。実際結果を見ると、活動したことがあると回答した方は2年度も増加していて、やはり皆さんどこかに意識はあるのだなということが、すごく受け取れまして、これはこれで良いと思うのですが、個人的な意見を申し上げますと、市民がボランティア、市民活動に対してどのような意識を持っているかについて、もう少し把握出来ていればより良かったかなと思います。

ただ、市民の方にはそういう意識があるので、行政としましては、今回市町村の役割というものもきちんとここに位置付けしていただきましたので、こちらとしては、どうやって皆さんにボランティアや市民活動に目を向けてもらうかという仕掛けづくりについても、市が行わなくてはいけないのかなと、反対に行政としてはそのように感じたところです。

○鎌田座長

先程、活動が楽しくなくなってしまうとのお話がありましたが、その辺は、いかがですか。

○宮本委員

実際、茂原市では、市民活動団体と市との協働事業で、茂原かるたでまちおこしというを行いました。小学校を含む市内40か所で標語や絵も募集して、子どもさんや一般の人も含めて皆で作ったのですが、結果、できたら、それを読むと昔これがあったなとか、地域の魅力を再発見できるきっかけとなり、お年寄りもかるたを楽しむなど、結構好評で、企画した団体も含め、皆さん楽しんで取り組んでいました。それから、今後、茂原には有名な七夕まつりがあるので、そこでかるた大会をやりたいとか、すごく皆さん夢を持っているとか、意欲を持って取り組んでいただける。そういう姿を見ているので、そういう活動というのは、楽しんで取り組むことができるところもあるだろうなということを強く感じています。

○鎌田座長

ありがとうございます。ぜひ、その辺は、最後の資料の5にありますような、事例的なところに落とし込んでいただければと思います。

○宮本委員

かるたは今年が1年目で、3年間の協働事業ということで助成金も出していますので、2年目もまちおこしに繋がる提案をしてくれると思います。

○鎌田座長

是非、取り組み事例などで解説付きで載せていただけると良いかなと思います。

山田委員、ボランティアや支援団体、市民活動団体など色んな事例を見ていらっしゃるでしょうが、全体を見ていかがでしょうか。

○山田委員

久々に参加させていただいて、事務局の方も入れ替わって、改めてよろしく願いいたします。

私どものスタンスで見させていただきますと、こういう計画を作るにあたって、まず現在の情勢と課題というのできちんとまとめることがやはり大事だろうなと思っています。そういう意味では、この第4章の人口減少に始まって、ワーク・ライフ・バランス、外国人、デジタル社会、それからコロナ、災害ですね、非常にここ2、3年、極めて速いスピードで社会が変化していることを痛感すると同時に、非常に中身も過不足なく的確に捉えているのかなという印象を受けます。私どももこういうトピックとなる部分を日々トレースさせていただいています。コロナも言うに及ばずですが、例えば少子化でいうと、今日なんか七五三が地域の行事から消えゆくのではないかというようなこ

とも紹介させていただいています。そういう意味では、まずは、この2、3年で大きく変化した社会、それから課題を的確に抽出しているという印象を受けます。

一方で、今、盛んに計画の文言についてお話が出ていますが、個人的にはもちろん計画も大事ですがやはり最終的にはこの結果というか実効性が一番求められるのだらうなと思います。第5章で具体的な計画、取組を書きいただいておりますが、やはり、的確に結果を導き出す、実効性に導くことが大事なのだと思います。

それから、あともう一つ言わせていただくと、令和2年度に目標を達成した項目が2つとお話がありました。例えば、ボランティア活動に参加したことがある人の割合が目標をこの時点では達成したとありますけど、東京オリンピックとかでボランティアに対する意識が高まったけれども、その後、そういった機運がもしかしたら低下しているのではないかとされているので、この辺りの実績というのは今後も注視していく必要があるのだらうなという風に感じています。

○鎌田座長

ありがとうございます。それでは関谷委員、全体の体系の話や、補完性のところを日常にどう落とし込めるかなど、全体的に見ていかがでしょうか。

○関谷委員

はい。先程から出ているボランティアに傾斜しすぎているのではないかという点について、印象としては恐らくあると思います。これは、多分、県民活動で課題解決活動という風になると、どんどん焦点を合わせていって、そうすると、何のための活動なのか、課題解決するのか、じゃあ誰がという風に、どんどんこう絞り込まれていく作りになっているからだと思います。例えば5頁の所に、県民活動の意義で社会参加とか、自己実現とかあるのは、その課題解決活動を行っている中から自己実現が見えてくるのではなくて、まずベースに日常生活があって、日常生活の中で、先程から出ているように、例えば課題解決という風には思っていないけれども、この地域が好きだとか、この町を何とか持続させたいだとかというような緩やかな思いがあって、じゃあ出来るところから何かちょっとやってみたいね、そういう色んな強弱濃淡色々ありますけれども、そういったものが、日常生活の中にあって、その中から、どこかに参加してみようかなとか、こういった団体活動を担ってみようかなというのが出てくるのだと思います。

だからベースにあるのは、日常生活であり、その生活をどういう風に、これからどうしていかなければならないかという思いの中で、この土地と共にありたいという愛着の話だったり、あるいはみんなでもっと協力し合いたいよねという願いであったり、そういう緩やかなベースがあって、その上に県民活動というものが成り立っているのだという位置付けの方が、的確であるように私は思

います。

その上で、生活上こういったものが必要になるよねとか、これはやっぱり困ってきている人がいるよねとか、あるいは仕事上、もっとこんな地域であって欲しいよねとか、色んな想いの中から出てきて、端的に言うところから色んな課題というのが見えてくるのだと思います。初めに課題ありき、国が決めた課題をやるかという話では全くなくて、そういう地域の日常生活の中で、自分達にとっての課題って何だろうというものがある形で出てくる。それは最初から揃って出てくる訳じゃなくて、立場によっても年代によっても、全然課題意識が違いますから、それが地域の中で色々な出会いとか、場面によってそれが理解されて共有されて、それがいわゆるボトムアップ的な課題設定になっていく。それをまた地域がどう受けとめて活動していくのかという立て付けになるかなという風に思いますので、その辺をどう描くのかというのが、すごく大事なかなと思います。

それを踏まえると、今回入れていただいた補完性の原理というのが生きてくると思います。補完性の原理というのは、ボトムアップの原理であって、前回は申し上げましたけれども、正確な理解としては、より小さな単位の自主性、自立性を尊重していくものです。だから、個人とか家族とかで出来ることはそこでやっていく。出来ないことは、近隣であったり、地域コミュニティでやっていく。それでも出来ないことは、例えば市民活動団体とか民間企業が色々補完をしていく。そういう色々な自助共助で出来ないことを、行政が補完していくという風な立て付けで考えていくというものです。これは市民にとっても、県民にとっても、行政にとっても大事な視点であって、行政もそういう風に考えていかないと多分、いくらお金があっても足りないということになってしまいます。そういう意味では、本当に必要なところに必要な支援をしていくのは、これからの行政にとって多分、必須の課題かと思しますので、そういう立て付けで、補完性原理というものをに入れていただいたというのは非常に良くなったところかなと思いますけれども、どのように理解するのかということについては、今、少し申し上げたような意味合いで、理解していただくと良いのかなという風に思いました。

それから、6頁、7頁の所で、主な主体とその役割という風になって、色々な活動主体が挙がっていますけれども、どこまで列挙するのかという悩ましい問題があります。市町村でこういった議論をする時もやはりどこまで入れるか、あれが入っていない、これが入っていないとなりがちなので、この辺をどう考えるか。主だったところを挙げていただいていると思いますけれども、いずれにしても、7頁に課題解決のイメージというのがありますが、これは市町村も含めてなんですけれども、少し気になるのは、多様な主体ということが言われる反面、私はいつも申し上げますが、活動単位の硬直化とか、行政の縦割りをよく言われるけれども、地域コミュニティもやはり縦割り化しています。自治

会は自治会とか、社協は社協、NPOはNPOとか。これがやはり今どんどん厳しい状況になってきていて、それぞれ皆さん一生懸命活動されているのだけれども、人が足りないお金が足りないという風な形でどんどん先細りになってしまう。だから、これからの地域で問われるのは、その縦割りをどうやって超えていけるかという部分、多様な主体という、それぞれがそれぞれやっているからいいよね、というところで下手をすると終わりかねません。でもそれではやはり先細りになってしまうので、それだけではなく、縦割りを越えて、もっと互いに協力し合うとか、補完し合おうということが重要だと思います。補完性に絡めると、水平補完という言い方をしますが、そういう縦の補完、横の補完も含めて、もう少し従来の硬直化した縦割りを超えていくという視点をぜひ入れていただきたいなと個人的に思うのですけれども、そういうイメージでこの7頁というものが描かれていると良いのかなという風に感じました。

同じようなことは、例えば、16頁の所にワーク・ライフ・バランスと書かれていますが、ここに書かれていることは全くもって正しいのですけれども、この県民活動との関わりで言うと、やはり、その県民活動、地域の活動に関わっていく関わり方というのが、今非常に厳しくなっています。例えば、子育てとか、介護とかというものを世帯単位でやっていかなければいけない。でもその世帯をベースにした自治会活動だとか、今とにかく枯渇の一途を辿っている。しかも縦割りでやっているから、なかなかうまくいかない。だからそういう意味では、市民、県民活動というものの在り方も今どんどん厳しくなっている状況があって、各方面とのバランスを図っていくということも必要にはなっているのかなと思います。だから、働くということだけではなくて、県民活動を行うということとのバランスについても合わせて考えていく必要があると思います。先程から申し上げているように、これからどんどん色んな主体が流動化して、どんどん交わってくるとまたそのバランスをどんな風に考えていくかということも大きな課題になってくると思います。そういう辺りまで含めた理解が大事かなという風に思います。

あと、今言ったことで、20頁、21頁の県民活動の現状の辺りで、理解・参加となっていますけれども、これはやはり聞き方が縦割りの聞き方だと思います。ボランティア活動に参加したことがありますかというのは、従来の枠組みへの参加です。でも、色々見ていると、関心はあるのだけれども、従来の枠組み、例えば自治会とかそういった枠組みには参加したくない、関心はあるのだけれどもそういう枠組みには参加したくないという層がかなりあります。そこをどういう風に拾っていけるかということがすごく大事で、従来とは違う枠組みとか、違う場面に参加してみたいという人達のことをどう意識した現状というものを描けるか。これはなかなかデータ的に示すのが難しいところがあるのは承知していますけれども、色んな現場を見ているとそういう部分が非常に気になります

ので、少し指摘だけさせていただければと思います。以上です。

○鎌田座長

ありがとうございます。

○白井委員

いいですか。

○鎌田座長

はい、どうぞ。

○白井委員

今、関谷先生がおっしゃったように、縦割りなのが行政です。そうだとすると、縦割りでは地域によっては通用しなくなります。中には、障がい者、高齢者、子どももいて、それを繋ぐように地域共生社会を作ろうということで、昨年4月に国が力を入れて、組織を作っています。ただ、それがどこまでこの活動の文言に反映されるべきか。

ここでは、ボランティアという言葉でコミュニティに参加するという言葉に変えても良いのではないかと思います。ボランティアを中心にするると全てボランティアが行わなければならなくなってしまいますので、計画に記載されたボランティアという言葉でコミュニティ参加とかに一部変更するのは良いかもしれません。今の内容ですと、皆さんがおっしゃるようにボランティアだけがいかに表立ってしまっているのです。それから、ボランティアでなければ県民活動は出来ないのかという話にもなってしまいます。そこの辺りを少し工夫したら良いのかなと思います。

前回の計画も沢山ボランティアと記載されていますが、やはりボランティアが強く出てしまっていて、コミュニティへの参加とすれば、ボランティアはやらないよという人も、だんだん県民活動やコミュニティに参加するならいいですよ、コミュニティに参加して、その中で何をやるかという話になってくると思います。

今の計画は上からの目線になってしまっているのです。下からの色んな活動を立ち上げてもらう形の推進計画を模索するのが一つの道筋ではないかなと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。牧野委員どうぞ。

○牧野委員

今回、なぜこのように私を感じたかという、例えば、34頁で「県民活動の体験機会の提供」の記載の所です。やはりオリ・パラの都市ボランティアというものを県が行って、そこにボランティアというのがものすごく紐づいてしまったがために、県民一人ずつに対して支援するというような感

じを受けた訳です。ここに記載された「県民活動の体験機会の提供」の所にボランティア、ボランティア、ボランティアと書いてありますが、県としてやるべきことは、このボランティア活動したい人とボランティアを必要とする団体を繋ぐマッチングのような、社協の人材マッチングで行ってもらべきものではなくて、もっとまちづくり活動を支援するような、他の活動を支援するべきではないかと思います。

そうすると、さっき吉田委員がおっしゃったように、自分のコミュニティの活動や趣味の活動等が、何かしら地域の役に立ち、県民活動に繋がっていくのではないのでしょうか。個人個人、県民1人ずつが、もちろん、そういう地域づくり、まちづくりに参加していくということをどうやって応援していくのかということだと思のですが、ここで言ったら本当に、県社協にやってもらえば良いのではないかという感じがどうしてもしてしまい、違和感があります。個人やグループ、団体、様々な関係機関や行政等があり、また、自治会、地縁があり、色んなコミュニティがある中で、どこかと組み合わせあって皆で盛りあげて県民活動を行っていくというような道筋になるのだと思います。どうしてもオリパラに引っ張られたなという印象を受けます。

○鎌田座長

はい、吉田委員お願いします。

○吉田委員

オリンピック・パラリンピックでボランティアのお手伝いした人達もおそらく、何か崇高な気持ちで活動した訳ではなく、趣味やちょっとした楽しみとか、歴史的な瞬間に関わりたいという楽しみ半分、興味半分で参加したのが結果的にすごい成果があるものに繋がったという形だと思なので、その崇高なものをレガシーに繋げるのではなくて、そういった元々は興味本位で始めた人がこう繋がったということをさらにレガシーにしていこうという繋がりの方が自然な気がします。また、そうした方が、先程の地域コミュニティとか市民活動であるとか、そういった所と関連付けやすいのではないかという気がしました。

○白井委員

先程も申しましたけれども、アクアラインマラソンはボランティアと言っているかもしれませんが、はっきり言いまして、本来のボランティアではありません。また、重要なのは本来のボランティアをどのように扱っていくかということだと思います。だから、オリ・パラについて若干触れていますが、過去に終わってしまっているし、それは頭から外しても良いのではないかと思います。

なぜなら、最初、オリ・パラでボランティアとして活動した人達が、それが終わった後、どういう形で他のボランティアに進んでいくのかというのは、県としてはすごく参考にしたかったのですけ

れども、たまたま延期されてしまい、オリ・パラの人達が活躍できる所が無くなってしまって、その後の動きが無くなってしまった訳です。

だから、オリ・パラ、オリ・パラと言っていますが、それはもう頭から外した方が良いのではないのでしょうか。本来のボランティアとは何ぞやというところから始まっていかないと、この推進計画はできないと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。事務局からいかがですか。この辺をもう少し伺いたいというところはありますか。

○事務局

今いただいたご意見を持ち帰らせていただきまして、中でまた色々検討させていただきたいと思っています。

○鎌田座長

関谷委員が先程おっしゃっていた活動単位ごとの硬直化という点は大変重要な指摘だと思います。7頁の図はこれまでも何期かの計画で見たことがある図ですけれども、例えば図の表現で、何か先程おっしゃっていた補完性の原理や日常、課題の発見等について、日常からどういう風に県民活動に持って行って、県民活動をどういう風に水平垂直に補完していくかが分かる図の良い表現はありませんか。

皆さんのお話は分かるのですが、先程の茂原かるたじゃないですけど、どういう活動をどういう風に行ったらこういうイメージが沸くのか、というような事例も少ないと思います。

水平補完や垂直補完はこうやってできるとか、楽しいところやボランティアからこうやってコミュニティ活動に発展してというような、1個1個の市民活動の事例やボランティアの事例ではなく、繋げる事例のようなものがあれば、また、7頁にあるような複雑な概念図ではなく、分かりやすい図がもしあれば、是非お考えいただくと事務局はありがたいと思うのですが。難しいとは思いますがいかがですか。

○関谷委員

本質的に表現するのは難しいですね。一番ボトムにあるのは日常生活であり、そこで学んでいたり、働いていたり、地域で過ごしていたりということがあって、それは楽しみだったり趣味だったりということから、課題解決まで含めて色々あると思います。特にここに挙がっているそれぞれの主体というものがあって、それぞれテーマ、活動分野別に、それぞれの役割を担っているというようなイメージがベースにあると思います。それに対して、共助の場というのは、そういう中から矢印

が出てきて、共助の場というか、私なりの言い方だと共通の土俵という言い方をしますけど、それぞれがそれぞれの土俵で活動しているけれども、そこに留まっているからなかなか幅広い共助連携になってこない。だから、共通の土俵というのをどういう風にするかということが、そのイメージの中では大事な描き方になるのではないのでしょうか。そこは行政含めて色々な多様な団体が乗っかり、別に全部が揃う必要はなく、課題に応じてもちろんそれぞれの範囲があつて良いと思うのですが、そういうそれぞれの活動のベース、活動の土俵があつてさらに、今度もう少し幅広い共通の土俵のようなものを作っていくというイメージでしょうか。市町村が作っている共通の土俵があれば、県が積極的に作る部分もあるというように何段か構えかで分けて描けると良いと思います。

○鎌田座長

多分色々なフェーズがあつて、最初はもやもやとしていたものが、だんだん線が見えて来てというような図になるのでしょうか。

○関谷委員

そうですね。

○白井委員

図に書くと7頁の図のような形になると思います。他に作るとしたら、地域支援や、それから先程申し上げた、地域共生社会づくり、こういうもやもやがあつて、中央に持って行ってそこで解決し、助け舟を出すのが県や市町村というような形の図になってしまいます。ですから、これはこういう形でも有りなのではないかと思います。そこに内容的にどういう風に踏み込んでいくかが問題だと思います。

○鎌田座長

これを作るためじゃなくて、結果的にこうなるという話ですよ。

○白井委員

そのとおりです。

○山本委員

やっとボランティアと県民活動の意味が分かってきたのですが、私も何となく、県民活動＝ボランティアという風にこの資料を読み込んで感じていたのですが、つまりはその自分の暮らしを豊かにする、地域を豊かにするという一人一人に焦点を当てて、一人一人は自分の暮らしや地域を楽しくしていくために、充実するためという位置付けでよろしいですよ。

しかし、この図の中でいうと、県民と市民活動団体が同じ枠の中で収まっているのですが、そうではなくて、県民一人一人というのをもっと抜き出して、それがベースに大きくあつて、県民一人一人

がそれぞれ市民活動団体にも参加するし、自治会にも参加する、PTAにも参加する、それぞれに加わる訳なのですが、この図だと、その一つの枠組みとして県民というものがあるって、市民活動団体が別にあるイメージとなるので、もっと個を取り出すようにすれば良いということなのではないでしょうか。

○白井委員

考え方としては、県民＝市町村民です。ですから、これは市町村民活動になりますけれども、文章的に言いますと、これは県民であり市町村民となります。

○山本委員

でも、何かもう少し、個人を大事にしていることが読み取れると良いと思います。誰かのために県民活動に参加するとか、先程あった課題解決ありきではないとか、課題解決のために県民として私は動かなければいけないのかという風な考えになるのではなく、自分がこういうことを行ってみたいとか、そういうことを実現するために動き方が色々ありますよということですよね。それは私たちの障害福祉の分野でも、障害のある人が暮らしていくには課題がいっぱいあるけれども、もともとはその一人一人の生き方や願いをどう叶えていくのかというところでは同じなので、もう少しそこが出せると良いのかなと思います。

○白井委員

山本委員がおっしゃいました障がい者の場合、結局、何か課題があった場合には団体として受け入れていかなくてははいけません。組織としては、その積み重ね、積み重ねがある訳ですので、その組織だけで解決するのではなくて、県全体の協議会、各地区協議会があると思いますが、それをどういう風を含めていって課題を提起しながら、そこに皆さんが集まっていけるのかということになると思います。この図はあくまでも各団体が持っている課題について、皆さんの考える共助の場に持って行って、皆さんで解決していきましょうという図だと思います。

○鎌田座長

牧野委員、以前の推進計画で、個から始まりだんだん時系列で発展してくような図を付録で作ったときがありましたよね。

○牧野委員

ずいぶん前ですよね。

○鎌田座長

2期前の計画だったと思います。A3の折り込みになっていて、右上に発展していくイメージで、個人からだんだん時系列で広がり、3本軸があるってというような図だったと思います。あまりにも複雑で評判が悪かったのですが。

○事務局

前計画だと思います。

○牧野委員

7頁の地域課題解決のイメージは、地域課題の解決の図というよりも、共助の場、課題解決の機会提供の場という図にすれば、皆さんがおっしゃるように、行政もいる、NPOもいる、県民や市民1人1人もいる、商工会等もいる、そういう共助の場というような図だったら、書き方として、皆さんがおっしゃっていたようなことが表現できるのではないかと思います。

よく協働では課題解決ということを言葉にしますが、課題に向かって、色んな主体が持っている強みを生かして、課題解決に向けて取り組んで行くというような、そういう場のイメージだったら良いのではないのでしょうか。この図だと、誰が誰を側面支援するとか分かりづらいものになっているので、みんな対等で持てるものを提供して課題解決に向かっていくという、もっと平たいイメージで良いのかなと思ったのですが。

○関谷委員

ちょっとよろしいですか。

○鎌田座長

はい、どうぞ。

○関谷委員

あまり詰め込み過ぎない方がよくて、それぞれでどんな領域があるのかということを図で示すことがまず大事なかなと思います。

つまりこれで言うと、先程、山本委員の県民を括らない方が良いという意見はまったくその通りで、県民は一番外側に大きなものとしてあって、県民であり、市民であり、いろんな側面がありますけれども、例えば、補完という考え方からすると、多くの人達は自助ということで、個人だったり、家族だったり出来ることを行っているし、あるいは、それぞれの思いで日常生活を送っているというのがベースにあるので、色んな動きが全部県民活動に収敛してくような構図はやめた方が良いと思います。実際そうではないのですから。前計画の斜めの図というのも、全てが県民活動に収敛していくという風に見えてしましますが、そうではなくて、基本、多様な形、色んな形で、もうカオスに近い形で、それぞれがそれぞれ色んなことを行っているのだけれど、それぞれがそれぞれで取り組むだけでは済まないことがあるということが、やはりこの市民活動の課題になってくる訳です。それぞれがそれぞれで取り組んでいるだけではやはり厳しいということで、今、市町村では、まちづくり協議会というものが作られるようになって、これらの共助の場というのは、市町村で既に色んな

形で行われています。もちろん上手くいっている所とっていない所がありますが、実証実験的なことも含め、そういうものがあります。

それで、そういう市町村ベースで取り組んでいることもあるけれども、それだけではやはりまだまだ足りない、リソースが足りない等の理由で限界があるので、近隣市町村の市民が連携するという動きも出てきていますし、少し進みは遅いですが、市町村間の連携も少しずつ出て来ます。それは決して一つの方向に向かって行くという話ではなくて、必要に応じて、それぞれの理想の連携みたいなものが作られているというような構図を示して、後はその中で、どこがどんな役割を果たしていくのかというものを少しくリアになるような形で示せば、例えば、県としては、そういった色々な理想がある中で、県としてはどこに力を入れてくのかということを手早く入れ込めるとクリアになると思います。

○鎌田座長

詰め込まないとしたら、概念的に書くしかありません。概念を書くとしたら、2次元でどう表現するかですね。

○吉田委員

3次元で広がりをもってこう円を描きながら段々広がっていくというような、役割がそれぞれあって重なり合う所があるみたいなイメージでしょうか。

○白井委員

イメージを頭に入れてもらうための図ですから、私はこれで良いと思います。いちいち細かく言ってしまうとそれを反映した図は出来ません。イメージとしてこういう形ということであれば、私はこれで良いと思います。

○関谷委員

ボトムアップ的に、例えば色々な動きがベースにあって、その中で、必要に応じて、あるいは関心に応じて、団体活動が展開され、連携の動きが出てくるという図が示されるだけでも良いと思います。

あとは、それに依って、どこがどんな風に役割を果たすかということを示せばよいと思います。補完性というのはボトムアップの原理ですが、例えば、市町村での連携が弱いというのは絶対県が入るべきで、県がもっとそういう各種団体が繋がるような場を積極的に作っていくべきです。これは市町村にとって意味合いは大きいですね。そのような役割を手早く入れ込むような図式にすれば、それだけでも十分だと思います。

○鎌田座長

事務局は持ち帰るということで大丈夫ですか。持ち帰るにしても重たいですよ。

○事務局

素材として使えるものがあれば非常に助かるのですが、何もない中でそのイメージを描くというのは難しいと思います。

○白井委員

先程も申し上げたように、地域包括支援センター、もう一つは、国が去年の4月に出した地域共生社会づくり、この2つを参考にしたら良いのではないのでしょうか。多分、同じような図柄になるかも分かりませんが、参考に見てこれを検討してみたら良いと思います。

○事務局

イメージについて今まで皆さんからお話をお伺いしましたが、皆さんが思っているイメージも若干違うかもしれないので、どのようにするかは一任させていただければと思います。結局あくまでイメージでしかないので、それをもう少し具体的なものとして、例えば、この資料5の中で事例として示すなど具体的に説明できると、イメージと具体的な取組が繋がっていき、もう少し分かりやすくなってくのかなと今話を聞いて思いました。イメージはあくまでもイメージですので。

○鎌田座長

逆に言うと、例えば、日常からこういう色々な組織が生み出されてきていて、個人の活動からだんだん発展してきてというようなストーリーが分かる事例が複数あれば、事務局は助かるのではないのでしょうか。図を書こうとしても難しいので、参考となる事例やイメージをそれぞれの委員に出し合っていて、それで、難しい用語があれば、関谷委員にぜひその用語の解説を入れていただければ良いと思います。そうするとこの推進計画で取組もうとしていることが、資料5の部分やイメージの部分とを合わせて見ると、何となく分かるようになるのではないのでしょうか。そのような方向で良いですかね。図を描くことから始めると、確かに大変ですよ。

○事務局

そうですね。おっしゃっているお話を聞くとイメージは何となく湧きました。確かに、いきなり地域の課題と書いてあると、そこから入らないといけないように見えてしまいますけれども、実はそうではないということですよ。

○白井委員

行政的な面で申し訳ないですが、このイメージには6頁に書いてある「主な主体とその役割」で記載している各団体が出てきている訳です。これらの団体がどのような形でこの協働・共助をしているのかということを表しているのが、このイメージ図です。座長や関谷委員がおっしゃっているの

は、一つの問題を取り上げていくために、個人がそれぞれ問題提起してそこに取組があって、それをどこに持っていくのかというイメージだと思います。そうではなく、これは全体のイメージなので、その辺を理解していかないと結局これはなかなかできないと思います。個人的なもののイメージを作るのか、全体としてイメージを作っていくのか、どちらが県民のために分かりやすいものになるかという観点から、持ち帰って少し検討してみてください。ただ、個人的なもののイメージにすると、今度は団体的なものが無くなってしまいます。団体が課題を提起して、最終的に共助の場で色々と検討していきますよというのがこのイメージの図で描いているものだと思いますので。

○関谷委員

図は全体の概念イメージを描けば私は十分だと思います。ボトムアップ的な、日常生活があって、地域の活動、市町村、県というような位相を含めた全体の緩やかなイメージを描いて、あとは、その別立てで、まさに座長がおっしゃったような、それぞれの部分でこういう活動があるという風にして、部分部分でそれぞれ事例を引っ張る形にすればイメージが湧くと思います。

さらにその取組に対して、行政はどういう支援を行っているのかということのをそれに並行して、描くようにすればクリアになると思います。

○鎌田座長

議論がなかなか終息しないところが面白いですがけれども、特に今の参考となるような資料5の取組事例や考え方について、この場である程度ご意見いただいた方がよろしいですか。それとも少し持ち帰っていただいて、後日、ご意見をいただく形の方がよろしいでしょうか。

○事務局

もし、今、思い浮かぶようなものがあれば意見をいただきたいと思います。

○鎌田座長

まず、茂原市の宮本委員、次に柏市の吉田委員、身近なところで何かご意見はないでしょうか。

○宮本委員

先程申し上げた協働事業がございます。経済活性に繋がりたいという思いで商工観光課と協働事業として行ってまして、うちの方で間に入って色々調整を行ったりしているところです。協働事業としてはスタートしてちょうど1年経ち、2年目も今度大会を開きたいとか色々考えていますので、経済活性というか、皆に地域をもう一度再認識していただく事例として取り上げていただければと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。吉田委員お願いします。

○吉田委員

クラウドファンディングの事例として、どこでも行っているとは思いますが、柏では、飲食店支援のようなことを行っています。飲食店の人達が自らクラウドファンディングを立ち上げ、柏は市立柏高校吹奏楽部もあり音楽が盛んな街ですので、そういうスタジオの支援とか、柏の名店の老舗バーを支援するとか、テイクアウトを支援するようなことを市や飲食店などが協働して行いました。これも地域の課題解決に最終的には繋がるものだと思います。あとは後々学校の部活を地域にということ念頭に置いて、クラウドファンディングで、プロの音楽家が中学生、高校生を集めて吹奏楽団を作っています。今、まだ活動を始めたところなので、これが成功するかどうか分からないですけども、まさに今地域で部活を支えるということを実験的に取り組みだしている事例でもあるので、そういったことは、ご紹介ができるかなと思います。

あと、個人的には、文化財の保存をガバメントクラウドファンディングで行ったのですが、文化財の古民家に関するクラウドファンディングで、夏目漱石がいたとかいうと何千万と集まりますけれども、名の知らない民家だと10万とか20万で終わってしまうのですが、一応130万集まりました。

○鎌田座長

ありがとうございます。事例という意味で白井委員いかがでしょうか。

○白井委員

社協としては特にはありません。

○鎌田座長

山田委員いかがでしょうか。

○山田委員

私は、個別的なことについては特にありませんけれども、今日皆さんの議論を聞かせていただいてやはり一番感じたのは、突き詰めるところボランティアとは何ぞやということなのだろうなと思いました。

ちょっと論点がそれるかもしれませんが、かつての千葉県に堂本さんという女性の知事がいて、あの当時としては比較的目新しく、NPO活動というものに非常に力を入れていました。

ただ、県民の意識調査を行ったりすると、県政の施策の中で、NPOというのは最下位というか下位に来ていて、それはやはりNPOというものは一体何だろう、そういったものがどういったものをもたらすのだろうということがまだ県民にあまり浸透してなかったからではないかなと思います。そういった意味では、自治体というのは、なかなか財政的にも体制的にも力が限られているから、こ

れから民間の力を活用していかなければいけないというその当時堂本さんが考えたことは斬新だったなと思っています。先程、関谷先生がおっしゃいましたが、やはりそういう民間の人たちの、楽しみとか、趣味とか、生きがいみたいなものをどうやって誘導していくかということが、この計画を作る上で大事なのかなと感想として思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。山本委員いかがでしょうか。

○山本委員

ボランティア体験とかそういう事例でも良いということでしょうか。

○事務局

お願いします。

○山本委員

ちょうど牧野委員がいらっしゃるのですが、まず、ちばし地域づくり大学校のボランティア体験というプログラムがあります。私達は船橋市の団体ですけど、受け入れ団体は千葉市以外でも募集していらして、プログラムの中で体験を必ず2日はするというような形になっています。それはもともと千葉市の、多分、ことぶき大学なども同じようにNPOに委託する形で運営されていたと思いますが、間にそういった団体が入って、受入プログラムもしっかり作ってコーディネートしてくださるので、受け入れる側としてもすごく安心して参加できます。私達の所に来た人は、自分が実現したいことがあって、それに関連する団体で体験したいということをおっしゃっていました。松戸市などもそういった市町村の体験プログラムに結構積極的に取り組んでいるのではないのでしょうか。船橋市がちょうど今年から始めるのですが、市民の方は、まずは市町村に、という風になると思いますので、市民大学校での良い取組を知ることができるよう、是非入れていただきたいなと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。関谷委員、文献でも何でも幅広くソースとして何かありますか。

○関谷委員

一つは佐原のまちづくりです。これについては、行政もそうですけれども、商工会議所を中心に色々な動きがあります。様々な活動団体が生まれていて、それが地域愛をベースにどんどん結びついて、行政は要所要所で色んな大型補助金を持ってきては繋いで、プロジェクトを仕掛けていくということをずっとやってきています。だからその辺で、総体としてのイメージを見せるというのは面白いかなという風に思います。ちなみに、来月佐原のまちづくりに関する本が出ます。僕も論文を

書いていますけれども、それもぜひ参考にさせていただければと思います。

それからあと、コラボ大賞に選ばれた銚子円卓会議のローリングストックの話も良いと思います。あれは、非常に立て付けとして面白くて、防災への備えと地域の産品というものを生かしていく仕組みになっています。防災と地域振興というものを掛け合わせたローリングストックという仕掛けになっていて、今、銚子市外部の自治体との連携も少しずつ始まってきているというところもあるので、円卓会議、それから千葉科学大学との連携含めて、モデルとして非常に面白いと思います。

それから、市民活動サポートセンターという視点も載せておいた方が良いと思います。よく知られているのは牧野委員が関わってきた四街道市と、それから富里市ですね。あと、面白い立て付けというか、動きになっているのは松戸市と柏市だと思います。この辺りが非常に興味深い動きになってきているので、サポセンという視点から少し入れるのも有りかなと思います。

あとは、それに絡めて中間支援団体ということにも光を当てるべきだと思います。牧野委員のNPOクラブもそうですし、あと、ちばのWAのような寄附というものを広げていくという活動も大事です。中間支援団体の強化と素案の中で謳われていますけれども、既存の中間支援団体をどう強化するのかということについても、もう少し踏み込んだ記述が欲しいかなと思います。それも含めて、そういう視点も有り得るかなという風に思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。牧野委員、何か事例はあるのでしょうか。

○牧野委員

私は松戸市の補助金や協働事業の審査を行う運営委員になっているのですが、コロナ禍でもあまり応募件数は減らずに、若い人達がエントリーしてきているというのが特徴かなと思っています。その中で一つ、国交省から何か表彰されたと思うのですが、食べられる植物を布のプランターで育てるという取組があります。最初、千葉大学の園芸学部のゼミの先生達とで提案があったのですが、松戸の資源として、最初は30個ぐらいの布のプランターを松戸駅から千葉大の園芸学部までの住宅街の道沿いに置いていくという内容でした。当初は、本当に大丈夫なの？自治会はどうなの？とか言っていたのですが、この3年で、国交省から表彰もされて、現在、プランターは180個ぐらい置かれています。今では、私の町内でもやりたいとか、マンションだけやりたいとかいうことで、色々な所から見学が来ており、テレビなど色々な所で紹介されています。そういう若い人達、今はもう大学生はどんどん卒業していて、大学院を卒業した人と一緒に町会、自治会、色々な人達を巻き込んで、コロナでコミュニティが疎かになるところをその野菜が皆を繋いでいます。トマトがもう出来たのねとか、ハーブがどうしたとか。協働事業として3年目で、大学から町内会、自治

会、市民や他の市内の人たちへという流れがあり、すごく成果が出た事業だと思います。

○鎌田座長

ありがとうございます。こうやって事例を伺ってみると、県の一番足元のコラボ大賞に良い事例が沢山ありそうだなという感じがあります。

千葉科学大学のローリングストックは、私も最近の大学の関わりの中では、断トツに素晴らしいと思いました。

先程のサポセンの話ですが、四街道市で鍛えられた人達がアピールして、団体として成長してそれを積み上げて、コラボ大賞を取っています。先程のサポセンの話とコラボ大賞の話と、個人の成長を全部そこで見られますよね。事例については、落選したところも含めて、気付かないところで県が一番お持ちかもしれません。落選したところは悪い訳じゃなく成長過程にあると思えば良い訳ですよ。

○白井委員

最後に一つ。ジンザイのザイに材料の「材」が用いられていますが、私はこういう計画を作る時に、財産の「財」を用いることを提言しています。

ある日本の大手企業では、ジンザイのザイは、財産の「財」を使っています。研修所の研修計画のザイは、財産の「財」だと思います。「材」だと人間が単なる一般の材料になってしまうけれども、財産でしょと言って、「材」を財産の「財」に変えてもらいました。人間は財産ですから。研修計画は今どうか分かりませんが、私が直した時はそうしました。日本語って難しいと思うのですが、人間を粗末にしているなど感じます。

○鎌田座長

ありがとうございます。事務局にもう一度伺いますが、確認したいことがあれば、もう一度どうぞ。情報はたっぷりだと思いますが。

○事務局

ご意見を本当に沢山いただき、ちょっと今消化しきれないところもありますが、持ち帰って検討させていただいて、またその結果を次回の会議の場でお示しできればと思います。皆さん本当にありがとうございました。

○鎌田座長

それでは資料5についても今のような情報提供でよろしいですか。

○事務局

またもし後日、こういうのを思い出したというものがございましたら、担当の方にご連絡してい

ただければと思います。まだまだ受け付けておりますので、よろしくお願いいたします。

○鎌田座長

本当に色々なご意見をありがとうございました。事務局で持ち帰ってというより、少し時間をおいて発酵させて、成熟させてかもしれませんが、取りまとめをよろしくお願いいたします。

議題（２）その他について

○鎌田座長

それでは、議題の（２）その他ですが、事務局から何かありますか。

○事務局

前回説明したスケジュールから、色々と事情がございまして、後ろ倒しになっていきますので、改めてスケジュールについてご説明差し上げたいと思います。

本日、11月17日に第2回懇談会を開催させていただきました。今後、市町村と庁内に意見照会をさせていただきます。今日の皆様のご意見も踏まえまして、第3回懇談会を1月下旬ぐらいに開催出来たらと思っています。

その後、2月上旬から3月上旬ぐらいにかけてパブリックコメントを取りまして、その意見を取りまとめて、最終的に3月に第4回の懇談会を開催した上で、年度内に計画策定ができればと思っています。引き続きご協力いただけたら、大変ありがたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

○鎌田座長

ありがとうございます。それでは、事務局にお返しします。

○事務局

鎌田座長はじめ、委員の皆様におかれましては、長時間にわたり活発なご議論いただくとともに、貴重な御意見を賜り、誠にありがとうございました。頂戴したご意見を踏まえ、この後、計画原案の策定作業を進めてまいります。

以上をもちまして、令和4年度第2回千葉県県民活動推進懇談会を終了します。本日はありがとうございました。